

方言の山野を行く (三編)

藤原与一

○この三編は、私の、自然傳受法の方言調査の紀行です。

○これで、自然傳受法精神の实地調査というものを、氣がるに考えとって下さるなら幸です。

い 方言の旅——あの宿、この人

きのうのことです。学校で、私のへやを訪ねてくれた人が、すこし話しをしているうちに、「ホドント」というようなことばをつかうんですね。「ほとんど」ということを、「ホドント」と発音するんです。こういう発音するのは、東北地方の人ですから、私はさっそくに、福島県のかたですか？と聞きました。するとその人がびっくりしまして、栃木県です。って言うんですね。栃木県なら北の方ですか？と申しますと、ええ、北です。それなら、矢板のあたりですか？矢板なんですよ。こういう問答がございました。私も氣をよくしまして、矢板話しをその人としきりにやったことです。

だいたい私は、あっちこっちの方言をしらべて勉強するのがしこ

とでございいますから、よく地方を旅行いたします。ある年のこと、東北地方をまわりまして、晩がたに、矢板の町におりたことがございます。小学校へ行ってみまして、先生がた二、三人にお目にかかりまして、なにかと教えていただきました。そうしておりますうちに、中の一人の先生が、今晩、私のうちへ行つて泊まりましよう。こういうことなんです。びっくりするやらうれいやらで、さっそくにお伴することにいたしました。やがて、その先生のうちに参りますと、お父さんが、いろりばたであぐらをくんで、お茶を飲んでいます。まあ一ぱいと言うものですから、私も、茶わんでそのお茶をいただきますと、これはお酒だったんですね。そこでいろいろの話しになりまして、夜もふけました。やがてお休みということになりますと、私の寝どころが、その先生たちご夫婦といっしょのへやに設けられているんです。恐縮いたしました、静かに、私も休みました。やがて電燈も消えまして、先生たちご夫婦もお休みになります。この先生がひじょうに熱心なかたでして、寝どころで私にいろいろと学問の話しをなさるんですね。国語の問題とか、あるいは国語教育の問題とかを、私に質問なさるんです。まあ、意見を

言えていうわけですね。そして、おとなりの奥さんに、あなたもよく聞きなさいよというようなことでもございました。まことに、私にとつては、めずらしい経験でもございまして、いま思い出しても、うれしくなることでもございます。

こういうお話しをしていますと、栃木県の南の埼玉県の宿に泊まった時のことが思い出されます。埼玉県の東の方に春日部という町がございまして、終戦後、まもないころでございました。この方を旅行いたしましたので、晩がた、だいぶんおそくなつて、春日部の宿に着いたのでございます。宿屋のおばさんが、靴は持って上がりなさいというものですから、私は、靴をさけて上がりました。当時のことです。もう、うっかり靴をそのへんに置こうものなら、なくなつてしまふというようなことでした。へやにまいりますと、もう先客が二人も来ていまして、それぞれ、枕もとに靴を置いて寝ているんですね。靴の黒いのと、頭の髪を黒いのとがならんでいるようなかっこうでした。私も、あいた所に夜具をのべまして、休みました。枕もとには靴です。このころは、あいべや泊まりでして、たたみ一枚に一人一人というようなことでもございましたから、混雑しました。寒いころではございますし、心の中で寒さむとしてまいりました。そうこうするうちに、廊下をあるいて来る二人の足音が聞こえます。おや、またお客さんだな、と思つていまして、夫婦がこんどはいつてきました。床のま近くに、あいている所がありまして、そこが、この人たちの寝る場所になりました。「一つやに遊女も寝たり」というような俳句がございまして、さっきまで寒さむしかつた私の気もちも、こういうご夫婦もいっしょということになりますと、ほのほのとした気もちになつてきまして、ほほえましい気

分にもなりまして、おかげさまで、安らかに、この夜をすごすことができましたのでございます。

夜の話はそれまでといたしまして、朝の話に移りましょう。

十和田湖の朝でございます。十和田湖、これは東北の北の方、青森県と秋田県との境にございます。十和田湖の朝のこと、休屋という部落で、私は、えびのてんぶらのま新しい料理をつくつてもらつて、ほんとにうれしかったのでございます。その宿は、むかしのことばで申しますと、木賃宿といったようなありさまでして、ひらやの簡素な宿屋でした。おばさんと、おじさんとの経営でして、ことにおじさんは、中風ということですから、ほとんと、おばさん一人の手できりまわしてました。私よりもさきに、農業学校の修学旅行の生徒さんが、三、四十人も来て泊まっていますと、おばさんはいがいく、そのせわをしていました。私はそこへ泊めてもらつて、そして、おばさんに方言を教えてもらいました。一晚すぎて、けさの、えびのてんぶら料理というわけでございます。きのう、十和田湖の遊覧船に乗った時は、こちらへ着きますと、その船がちやうど世界館という宿屋の前に着きます。お客さんはいたい、世界館へはいっていきます。私は、貧乏旅行をいたしております者、むろん、世界館というようなのは、私の行く所ではございません。道を左にとりまして、この宿屋をたずねたのでございました。おかげさまで、けさのおいしい料理をいただきますと、さあ出発というころ、表はどしゃ降りです。すると、宿のおじさんが、私に一本のかさをかしてくれまして、自分もまたかささとして、バスの停留所まで、私を見送つてきてくれます。私はすこしもぬれないで、安らかに、バスに乗ることができました。そうこうしますうちに、むこうの方

から、おおぜいの人が、もうずぶぬれになってやっ来て来ます。ゆうべ世界館で一夜を明かした人たちです。もちろん私は、人の不幸を喜ぶものではないかもしれませんが、それはそれとして、その人たちのことはともかくといたしまして、私は、自身のしあわせを、しみじみと感じました。雨にけがる窓の外で、おじさんが立って見送って下さった様子を、今も思いおこします。

十和田湖の朝のことから、こんどは岩手県の盛岡の朝のことを思い出しておきました。これは冬の雪のころです。ひどい雪の中で、私は一夜を盛岡の駅で明かしました。夜明けがたになりますと、ずいぶん冷えこんできまして、もう、朝になるのを待ちかねたのでございます。ようやく人の行きかいはじまるころになりますと、私は、あたたかい味噌汁をたべてみたくなりました。どこかの宿屋さんで朝ごはんをいただきたいなあ、と思ひまして、町へ出ました。しばらく行きました、橋を渡りまして、左に折れますと、ちよつとした宿屋さんがございます。そこへかけこみますと、やや若いおばさんでしたが、出て来るなり、ぐまあ、かわいそうに。『って言うんですね。どうも私の身なりがたいへんみじめだったらしいんです。おばさんは私をいたわってくれまして、さあ、上がれていうわけです。そして、さっそくに、おいしいおみおつけを出してくれまして、それにまた、かぼちゃの煮つけのほかかかと湯気の立つごちそうも出まして、思いもよめなかったごちそうを、腹いっぱいいただきます。当時は非常時というところでございます、かぼちゃの味もひとしおというところでございます。あんまりうれしかったものですから、おばさんにおねだりしまして、ぐ記念にこのかぼちゃの種を下さい。』と申しますと、おやすいご用だと、新聞紙にその種を

包んで下さいました。それをいただいて、うちへ持って帰ったのでございます。翌とし、このかぼちゃの種を植えますと、無事にかぼちゃが育ちまして、あの東北かぼちゃの、赤い、大きなのがなってくれました。私はその初ものを、自分の先生に持って行つたことを思い出します。この先生は、ほんとうに、非常時の中でも、清らかな生活をしていらした先生でして、東北かぼちゃの初ものを、また、喜んで下さったのです。

盛岡のお話して、もう一つ、つけそえたいことがございます。これは夏でございましたか、やはり非常時のころでございました、お米を持って旅行するというようなところでございました。盛岡で、小笠原リッさんという、りっぱなおばさんに会えたのです。このおばさんに、岩手ことばをどつきり聞かしてもらひまして、胸もふくらむ思いで、大いそぎで駅に出ました。さて改札口を出ようとすると、さっきのおばさんが、小笠原リッさんですね、もんべ姿で、あたふたとかけて来てくれました。そして、これをということばと共にさし出して下さったのが、お弁当つみなんです。私は、それをおしいたいで、汽車にとび乗ったというようにござい

ます。
東の方のあの宿この宿を思い出すたびに、感謝の気もちが一杯でございます。

ろ 方言の旅——子ども

私は、地方のことばをしらべに出ますと、方言調査でござい

が、その土地の子どもさんと、はじめに、あそぶことが多うございます。子どもさんは、土地ことばの生活をするともに、共通語の、ものの言いかたもしますから、はじめての者にとつては、たいへんいい相手です。

四・五年まえに、三重県の伊賀の国へ行った時のことでございます。六・七人の子ともさんと仲よくなりました。小学校の六年生の男の子たちです。この子たちと一週間たのしく暮らしまして、いよいよおいとまという時に、私は、〃記念に杖をつくって下さい。〃と言ったんですね。そうしますと、五、六人の連中が、もう一散に山へかけあがりまして、おどろいたことに、めいめい一本ずつ、杖をつくって来たんです。小学校の運動場の片すみで、その杖をならべまして、私に、どれでも取れって言うんです。さあ、これには困りました。見ますと、どの子どもさんも、みんな、しんげんな表情をしまして、自分の杖を取ってくればいいがなといったような様子なのです。私はすっかり感激いたしました。そしてまた、ほんとにこれは申しわけないことになったという気持ちで、困っておりますと、一人二人の子ともさんが、〃どれでも取っとき。取っとき。〃と言って、慰めてくれるんです。もう絶対絶命というところで、一ばんはしっこのを、そうっともらったようなことでしたが、もう文字どおり残念で、気の毒でした。この子たちが、バスの停留所まで来てくれました。私の乗ったバスを退っかけながら、見送ってくれたのが、今もまぶたに浮かびます。

こんどは、女の子ともさんの話をいたしましょう。三年まえでございましてか、岐阜県の美濃の國の山奥に旅行したことがございまして。この時は、おりよく、私の娘をつれて行くことができました。ちよ

うど大学一年の子でした。これが薫子しほという名まえなもんですから、さあ、土地へまいますと、小学校の子ともさんたちも中学生さんたちも、みんなが、薫ちゃん薫ちゃんっていうわけで、ついてまわるとですね。方言調査の中で、この子どもさんたちとあそぶのに、忙しゅうございまして。といつても、それが私の方言調査なんです。薫子は、毎日、私の手つだいをしてくれるとともに、子どもさんたちと、水あびにも行くんです。水あびに行こうと言って、誘いに来るんですね。

よほど仲が深くなつたものと見えまして、薫子は、そのごも、みなさんと文通しています。それが今日まで続いております。小池籬子さんなんていう女の子が、もう中学の一年生か二年生でございまして、いろんなたよりをよこしてくれます。どうぞ、いい娘さんになつてくれればよいが、というような気持ちでおります。

女の子のお話しをしていますうちに、一つの深刻な話題を思い出しました。これは昭和の十七、八年のころのことでございます。貧乏對生の私が、やはりむりな旅行をよくして、ある夏のことでございます。高松の駅で夜明かしをいたしました。夜の明け白みに、駅の前植えこみの所を見ますと、若いお母さんが、小さな女の子をかかえてうずくまっていますね。もう、見るからに哀れな様子でございましたから、心配いたしました。まあ、縁というものでございましょうか、下り一番の汽車に乗って、私が腰かけていますと、ちようどそのまん前の席に、その母子づれが乗って来て、すわつたのでございます。まあほかにお客さんいませんし、話すともなく、しぜんにお話しをはじめました。だんだん聞いてみますと、この若いお母さんは、神戸で、ある月給とりさんの奥さ

んとして、いたんですね。ところできのうのこと、ご主人とけんかをしてしまったというんです。私にわらわるいんです。私にどういふことを言いなから話すのを聞きますと、この奥さんが、とうとうかんしゃくをおこしまして、ご亭主の洋服を破ってしまつたつていうんですね。これはまたひどいことをやったものでございます。出て行けというようなことでしたでしょうか、出て行くつていうような調子であつたでしょうか、とにかく、この母子は、神戸を発ちまして、宇野―高松の連絡船に乗りまして、ゆうべ高松に着きますと、けさまで、この高松駅ですごしたということです。私は、その小さな嬢ちゃんの事を思ひまして、このお子さんのためには、どんなことがあつても、いいお母さんになつてあげて下さい、子どもさんのためには、どうしてもお父ちゃんとお母ちゃんといふしよに暮らさなくてはというようなことを、青二才、若造の私ではございますけれども、私なりのことばで申しました。すると、ふとですね。このお母さんが、はらはらと涙を流しまして、私に申しますのに、この子があなたを拜めつて言うんです。私にびっくりいたしました。どういふことなんでしょうと聞いてみますと、ですね。このお母さんがひざに嬢ちゃんをだっこしています。嬢ちゃんも、私の方を向いて、だかれています。お母さんは、両方の手をまわして、嬢ちゃんを抱きかかえていますね。嬢ちゃんは、自分の両手で、そのお母さんの両手をとりまして、拜む時に手を合わす、あの合わせかたをさせたんですね。お母さんの手をとつて、そういうことをさせたのです。で、お母さんは、この子どもが、おまえの話聞いて、おまえを拜めつて言うんですよと、こういうことなんでしょう。ああそうですか。そういう嬢ちゃんの気もちをほんとうに胸

にしめて、強く生きて行きましょう。と、お母さんを励ましたことです。この若いお母さんのことは、伊予の松山だそうできて、松山までの切符を持っていました。松山へも電報を打っていますから、一度このまま松山にたどり着きましょう。そして、すぐに神戸にひきかえします。どんなことがあつても、主人にわびを言つて、どんなことがあつても、りっぱにがまんして、いい生活をしますから、どうぞ安心して下さい。と、こういうことを私に話してくれるんですね。ああ、そうですか、どうか、ということばで、しばらく安らかに同車いたしますうち、私は、一つの駅に來まして、途中下車をいたします。ここで私は降りますが、お名まえは聞かないことにしましょうね。と、いうことで別れたんですね。そのご、その四国の鐵道に乗るたびに、いえ、乗らなくても、私は時おり、この母子を思ひおこすのです。今ごろは、子どもさんもいいお母さんになつてゐることかと思ひますが、みなさんが、ほんとにしあわせに暮らしてゐてくれるにちがいないという気がいたします。

こんどは、私が、子どもさんのことで、たいへんびっくりした話を申し上げましょう。ある島に旅行した時の事でございます。ちょうど田植え時でございます。親たちはせせとばかり、子どもさんたちは子もりに忙しいという時でございます。子もりをする小学校六年生の女の子、そうですね、三人、四人、五人くらいでした。そういう子どもさんたちにたのみまして、しばらく私といふしよにあそんでもらいました。お寺の庭に行きました。私は縁がわに腰かけて、ちゃんと書く用意をしておりますと、その子どもさんたちが、何かことばを思ひおこしては、飛んで来て、教えてくれます。それを私が書きます。子どもさんの方は、ついでに、その縁

がわにひろげてある駄菓子をつつまんでは、また行ってあそびます。ことを思いおこすと、また言いに来る、菓子をたべる、と、こういうようなたのしい生活でございました。そのうち、子どもさんたちの気が変わりまして、縁がわですわりこんでお菓子をたべることになったんですね。そこで、おんぶしている子もおろしたんですね。よちよちあるきのぼうやや、じょっちゃんがお寺の縁がわで、それこそあぶなっかしく、よちよちやります。中の一人のぼっちゃん、あつというまに、その縁がわから落ちたんですね。〃落ちたつ。〃と、どの子か言いますと、私は思わず目をとじました。ああ大変なことになった、もう方言研究もこれでおわりかもしれない、というような気さえしました。みんなでかけつけてみますと、これはまた驚いたことに、ぼうやは、かすりきす一つうけていないんですね。そのぼうやは、また、よちよちとそのへんをあるきはじめます。元氣者でした。私はもうほっとしまして、うれしくなりまして、それこそいっしょうけんめいで、この子にほおずりをしたのです。

その晩、私は、ぼうやのいい物を持って、お母さんの所へおことわりにまいりました。ところが、お母さんは、へ？というふうで、このことを知らないんですね。〃やあ、これはまた、私が出すきたことを申して来たでしょうか。じつはきょう、こうこうでした。〃と言いますと、お母さんは慣れたもので、〃よく落ちるんです。〃というような調子なんです。ぼうやは、お母さんに抱かれて、私ににこにこ笑いがおを向けていてくれます。私はほっとするやら、また、その子もりのお姉ちゃんに申しわけないと思うやら、まあ、くさくさの思いで一ぱいでございました。

ところで、これが縁になりました、そのお母さんにもまた、あらためて、土地ことはをいろいろ教えてもらうことになりました、そのあくる日も、そこへおじゃまに行きました。ぼうやのとりもつ縁でございます。お姉ちゃんもよく勉強のできる子どもさんのようでしたが、このぼうやも、お姉ちゃんに負けないうで、よく勉強するようになつてくれればと祈っております。私は、このぼうやが、やがりっぱな青年になったら、まあまあ、あの縁がわから落ちたことを、すっかり忘れようというような心もちでいます。

(37・7・22 放送)

は 方言の旅——五島列島に方言を求めて

私は地方に出て、ことはをしらべるのがしごとでございますが、こういうしごとをやっていると、人がよく聞きます。〃はじめての所へ行くんだったら、紹介状でも持って行くの？〃 私はそういうことはあんまりやりません。また、人が、〃教育委員会なんかにたよるの？〃というようなことを聞きます。私は、できるだけ、そういうことをやらないようにしているんです。そして、もう、いきなり土地の中へは行って行くというやりかたです。まあそれで、じつさいうまくいくんですね。土地に入りますと、しぜん、土地の人になつてしまえるように思います。私はややかたい方の人聞らしくて、人にもよく言われるんですが、それでも、方言をしらべに土地へはいりますと、ふしぎに早く、土地の人になじむことができます。土地の人にかわいがつてもらえるように思うんでございます。

三十七年五月の上旬、中旬に、九州長崎県の五島列島の方に旅行

いたしましたので、その五島のお話しをこれからいたしてみましよう。

相手を見つけることで、中でもおもしろかったのは、五島調査のさいごの日でした。五島下島に福江という町がございますが、これは市でございます。福江市というのでございますが、その福江市内で一ヶ所、調査したいものだという心ぐみです。まず、町をぐるぐるぐるあるあるまわりました。あそこは、城下町でして、古いお屋敷、あるいはお屋敷あとというような所もございます。ま、そんな所からこんな所、あちこちいたしました。市役所のそばまで来ました。一軒のたばこ屋さんがございます。ふと見ますと、おばさんと娘さんがその中にいまして、や、こりやどうもいい被調査者らしいぞ、私の調査の相手になって下さるのにいい人らしいぞ、というよな気がいたしました。まあ、こういう気もちが、ふしぎと当たるんですね。私は、どうかして、このたばこ屋さんにはいりたいものだという気もちになりまして、前を行ったり来たり、二・三度いたしました。思いきってはいりまして、私は、たばこを買いながら、この福江の土地ことはのことを、一つ二つたずねました。

さいわいなことに、この娘さんが、交換局に勤めておりまして、電話の交換手さんなんですね。五島の島のあちらこちらから聞こえて来る島ことはを、よく覚えていらっしゃるんです。そういう方言への興味を持っているかたでしたから、しぜんに、とんとん拍子で、話しは本調子になりました。私の方言調査は、とどこおりなく進展いたします。娘さんはまた、気をさかしまして、前の家のおばさん、といっても、これも三十そこそこの人ですが、この人を招いて来ます。この人がまた、さばけた人で、腰かけて足を組んで、

からだをゆすつてですねえ。大ばなしをやるんです。やがて、ひもじいということになりまして、くおじさん、うどんをとってたべよう。くと、こういうことです。私も一はしりしまして、まんじゅうを買って来るなどいたしました。みんなでたのしくたべました。そうですね。二時間ぐらいここでおじゃましましたでしょう。私のねらいとする調査項目は、みな、談笑の中で、一とおり、しらべることができました。おいとまする時になつても、いったいおまえはこの者なんだいとか、あるいは、どこから来たのだいというようなことは、問わないですね。そんなことは問題じゃない、ただ、たのしく遊んだことがよかつたんだといったような顔つきなんですね。私は自分で、それではすまないと思つて、いちおう、さいごのあいさつをしますと、先方も、なにかと話してくれます。驚いたことに、あとから来た、前の家のおばさんも、この娘さんも、じつは郷土史に興味を持った人のお子さんだったんですね。そして、あとから来た、前のおばさんも、私の用向きを、暗々のうちに理解していたらしいんです。理解していて、そういうことは何も言わないで、くだけた態度をつらぬいてくれたらしいんです。私は、ここで、ずいぶん幸運な目に会いました。

この五島列島の一ばん南の島の、しかも西南のはしに、大宝^{たいほう}という部落があります。この大宝部落で、一週間の間、私は、いわば要地調査というような、重点調査をいたしました。その時に泊まりました宿屋の、おばあさんが、別室で暮らしているんですね。ナルというおばあさんで、「旅館のナルバンバ」というので、村ではおとつております。おもしろいおばあさんでして、年令を尋ねますと、一晩ごとに、年かすがちがうんです。よくわからないというような

調子なんですね。八十三、四、五のあたりを行ったり来たりするんです。このおばあさんが、氣っぶのいい人でして、私のために、いろんな人を集めては、話しあいさせるんですね。まあ、話し友だちを引っぱってきては、放談会をやるわけです。五月ですけれど、こたつがございまして、みんながこたつをかこんで話しをするんですね。その話しは、その時どきでたらめばなしなんですけれども、しかし、それが一々、私にとっては、方言調査のいい機会になるんです。このナルバンバさんは、字はあまり読めない人のようでしたが、しかし、肝ったまの大きい人か、ですね。方々を旅行しております。いつかは、子供さんをつれて、大連に行ってきたということでした。その大連旅行のお話しなどは、まことにおもしろいお話で、みんなが大わらいます。そういうようなお話しのうちにも、もう夜も十一時をすぎてしまうんですね。むりにむりに、おいとまして帰ります。おばあさんは、ここに泊まれ、旅館よりもここがよかるう、と行って下さるのです。

おばあさん連中はばかりではなく、おじいさん連中にも、だいにしてもらいまして、この村のお寺で念仏がある時にも、私は招待されました。念仏の数珠とともに繰り、またあとで、方言の話しを聞かせてもらうというように、まことによかったです。そこそこの土地にまいますと、まあ今でこそ、ラジオやテレビというようなものがあります、みなさんが、それぞれにたのしんでおられますけれども、一むかし前は、そんなに、たのしみのたねといつては、なかつたんですね。みんなが寄つて話しあうということが、なんととっても、大きなたのしみだったらしゅうございませう。そういう話しあいの席では、たとえばつみのないうそを言うこ

とも、「鉄砲をかます」というようなぐあいだ、やっぱりぐあいきょう、あるいはリクリエーションだったんでございましょう。うそのねうちというものが、そういう話し席では、あったんですね。それと似たりよつたりの、話しずきの世界へ、私は旅行するのですから、一座の中へすぐに引き入れられるわけです。何をしに来たのかというようなことは、あまりきかないで、さっそく、平素の話しの中へ入れてくれるんですね。それにしても、なんとなく、この男はいつたい、こんな土地のことを聞いて、どうするんだらう、というような気もちば、あるらしいんです。が、同じ土地でいく日もおりますという、土地の人は、私が説明しなくても、しぜんに、私の研究の目的を理解してくれます。これはおそろしいことです。どういうことになるかと申しますと、あんなに熱心に書きつけているんだから、あんなに紙をたくさんつかっているんだから、あれは何かきつとためになることをするんだらう、と、こういう推察なんですね。まあ、おかげさま、というところでございます。

なんと申しまして、村の生活は評判高い生活でございまして、私のようなしごとと者がまいますという、そのことが、すぐに村じゅうへ広がってしまいます。たとえば一つの部落へ行きますか。そして、そこで、一調査をやります。次の部落へ行ってみますと、私が行くよりさきに、うわさの方がもう伝わっているといううなことでございます。

こうした村あるきの時に、時どき出あいますいい勉強家、そういうかくれた勉強家があることは、これは気を付けなくてはならないことだと、いつも思っております。何の雑誌に発表するということもなく、ただこつこつこつと、自分で勉強している人がいるん

ですね。この五島でもそうです。一つの部落へまいりましたところ、ちょうど、バスの停留所でございましたが、一人のおじさんに出あいました、この人が、りっぱな方言研究家なんですね。私にいろんなことを教えてくれました。

その教えてくれたかたに別れまして、バスに乗って行ったのが、黒瀬という部落でございました。ここでまた、一軒のうちをたずねますと、まったくはじめての訪問ですけれども、私をあたたくかへてくれました、おじさんも、おばさんも、かわるがわる、私にいろんなことを言って、お話しを聞かせてくれます。それが、私にとっては、みんないい方言の勉強なんですね。親切なおばさんは、
クもう、こんど来る時には、まっすぐにうちに来て泊まれ。と
言ってくれるようなことです。このおばさんは、子どもさんに恵まれたかたでして、男の子どもさんが八人、女の子どもさんが三人とい

うような子福者でございます。一ばん上の子、お姉さんをはじめとして、みんなの子が、親おもいの子どもさんだというので、うらやましいようなお話しを、たくさん聞かせてもらいました。

まあ、方言の勉強旅行とは言いながら、ほんとうに、私の心をちゃんと洗い清めてくれるようなお話しが、そこでもここでも聞かれまして、五島列島の旅行は、いろいろと、いい勉強になりました。ひとくちに申しますと、土地の素朴な人たちは、まったく、純粋なものを愛する人びとだということでもございましょうか。そういう、ほんとうにきれいな気もちでいる中へ、私どもがはいって行くのですから、洗い清められないではいられません。そういう所へ出かけて行くんだと思うと、もう、旅行は、出発の時からたのしいんですね。まったく、はれやかな気もちになります。